2023年9月22日葛城古道で観察した植物

作；岡田弘

ツルボ(蔓穂)ユリ科キジカクシ科ツルボ属*花期＝8～9月

名前の由来＝ツルボの球根の皮を剥くと表面がツルツルしており、その様子から「つるつる坊主」の「ツルボ」と名付けられた説、もう一つは和名の参内傘（サンダイガサ）とは公家が付き人に持たせた傘に似ている花姿だから。日本全国の畦や草地に自生する多年草、昔から薬効があるので利用されていた、皮膚病、神経痛、火傷、切り傷などに、球根を擂り潰して湿布薬として使用され、驚異的な**薬効**を発揮していたので重宝されていた、今でも医薬品の主成分に使用されている、更に研究が進み様々な症状に効能があることが判っツた***花言葉**＝誰よりも強い味方、流星のような

アキノノゲシ（秋の野芥子）キク科ノゲシ属　＊花期＝8～11月

名前の由来＝春に咲くノゲシに似て、秋に咲くから、ノゲシとは、葉がケシの葉に似ているので野に咲くケシということで。日本に稲作が伝わった頃に伝わった帰化植物、日本全土に分布し野原や道端に普通に自生している、草丈が高く２ｍにもなる、1～2年草、葉は羽状に分裂するののとしないものがある、茎の先で分枝して舌状花を付ける、花は朝開き夕閉じる花色はタンポポやノゲシに比べ薄黄色。**若芽や若葉は食べることが出**来る、茎や葉から出る乳液が苦いので良く晒してから調理する、お親し、和え物、漬物、天ぷら、煮物、スープ
＊花言葉＝幸せな旅、控えめな人、謙虚、心優しい人

イボクサ（疣草）ツユクサ科イボクサ属　*花期＝9～10月

名前の由来＝葉の汁を疣に塗ると疣が取れることから。日本全国の湿地、水田、休耕田に自生、茎が柔らかく直ぐ千切れそこから繁殖するので水田に侵入した場合除去に苦労する今回は道端に群れて咲いていた、葉はツユグサの葉を細くしたような形状で、互生、全縁で葉の基部は茎を抱く、花は、茎先や葉腋に一個、花弁は卵形で３個、先が淡い紅色、下半分は白色、名前の由来の疣が取れる薬効はないそうです。**＊花言葉**＝生命力旺盛

ヒメクグ（姫莎草）カヤツリグサ科カヤツリグサ属＊花期＝7～10月

名前の由来＝ヒメは小さいという意味、「クグ」はカヤツリグサの古語です。言うならば小さいカヤツリグサという事。多年草で日本全国の平地や道端の日当たりの良い湿った場所を好む多年草、根茎は紫色を帯びて長く横に伸びて節の所で有花茎を直立させる。葉は偏平な線形で柔らかく茎の基部につく、有花茎は高さ10～20cmで断面が三角（茎は三角形）有花茎の先端に無柄の小穂が密に集まり0．5～1．2cmの球状となり、緑色の花序を1個つける、**＊花言葉**＝私を見て、真っ直ぐな愛、希望の架け橋。今回は道端に多く自生していた。

ジュズダマ（数珠玉）イネ科ジュズダマ属＊花期＝7～10月

名前の由来＝実が硬くて光沢がるので、糸を通して数珠を作ったことから。昔遊びで「お手玉」の布袋の中に入れていた。東南アジア原産の多年草、寒さに弱いので寒冷地では1年草、主に水辺や湿地に群生、空き地や道端でも見られる、今回は線路脇に群生していた。茎が多数出て大株になる、高さは1～2mになる、葉は互生で太い白い葉脈が目立つ、基部は鞘になって茎を抱く、花は雌雄別で同株、ハトムギはジュズダマの改良して作られたものです。ジュズダマは薬効があり、神経痛、リュマチ、肩こり、等、お茶としても、固い皮を除いて食用にもなる。**花言葉**＝祈り、恩恵、等。

カヤツリグサ（蚊帳吊草）イネ科カヤツリグサ属、＊花期＝8～10月

名前の由来＝茎を引き裂くと四角形を作り、ちょうど蚊帳を吊つた様になるので、子供の遊びとしていた。本州～九州の路傍や草地に普通に生えている、今回は田んぼの畦道や道路わきで多く見かけられた、草丈は20～30cmになる、茎や葉は堅くて丈夫である、茎は三角（△）葉は細く2～4mm頂部に輪生に生え、其の上に花径が５~１０本花火の様に伸びている、
***花言葉**＝伝統。歴史

その他、多く見た植物、マルバルコウソウ、マメアサガオ、アメリカアサガオ、エノコログサ、アキノエノコログサ、オオエノコログサ、シマスズメノヒエ、オシバ、メヒシバ、芙蓉の花、柿、等々